

老年看護学実習における看護学生の認知症高齢者に対する関係形成の過程 — 学生一事例の分析 —

Analyzing How a Nursing Student Established a Connection with the Elderly With Dementia in a Geriatric Nursing Practicum

井上 美代江¹⁾*, 太田 節子¹⁾

Miyoe Inoue, Setsuko Ota

キーワード 認知症高齢者, 老年看護学実習, 関係形成

Key words elderly with dementia, geriatric nursing practice, establishment of connection

抄録

背景 老年看護学実習において、看護学生（以後学生）が認知症高齢者を理解し、良い関わりを持つことが困難であると報告されている。しかし、それらは学生の記録に基づいたものであり、学生の観察の視点や無意識の行動は含まれていない。そこで、学生がどのように認知症高齢者を理解し関わっていくかという関係形成の過程を明らかにしたいと考え本研究に着手した。

目的 介護老人福祉施設における老年看護学実習で、学生の認知症高齢者に対する関係形成の過程を明らかにする。

方法 対象は、介護老人福祉施設で認知症高齢者を受け持った学生1名である。データ収集は、認知症高齢者（以後A氏）に関わる学生の観察者としての参加観察と半構成質問紙による学生への面接および学生の実習記録とした。分析方法は、参加観察、面接、記録のデータから、学生のA氏への関わりに関連する場面を再構成し、学生のA氏に対する関係が形成された場面を抽出した。

結果 学生が認知症高齢者に対する関係形成に関連した場面は、次の6つの場面であった。①関わる方法がわからず、A氏の表情を観察しその意思を読み取ろうとした。②教員のアドバイスによりA氏に関わる手段を発見した。③A氏との関わりから得た情報と施設からの情報により、抱いていた印象が変化し、A氏の理解を深めた。④無意識にA氏の行動を観察し、A氏の状態に応じた生活機能を高める看護ケアを行った。⑤A氏の施設における生活目標を理解し、自立支援をした。⑥レクリエーションでのA氏の自発的な行動から、その情報を活用して筋力訓練を指導した。

結論 学生は、実習初日の認知症高齢者に対する戸惑いをきっかけに思考し、教員や施設の情報を意識的に取り入れてより良い関わりを模索しながら、認知症高齢者の生活機能を高める看護を積極的に提供していることがわかった。そのため、教員は学生の認知症高齢者への関係形成の過程をよく観察し、学生の思考過程に注目しながらを指導することが必要であると考えられる。

Abstract

Background We do not use these symbols in English During geriatric nursing practicums, nursing students are reported to experience difficulties understanding and relating to how to provide care for the elderly, especially the elderly with dementia. However, previous reports have not examined the thoughts and unconsciousness behavior of students. As nursing educators, we studied here how a nursing student understood and started to provide care for a elderly with dementia.

Purpose To clarify the process of how, in a geriatric nursing practicum, a student established a connection with the elderly with dementia at elderly welfare facilities.

Methods This qualitative study that collected data through participant observation and semi-structured interview, focusing on one nursing student. The student's practicum records were referenced as needed. The participating student on a geriatric nursing practicum provided consent to be the subject of this study. The involvement of the student with an elderly individual with dementia for whom she was responsible was the target of study. The method of analysis was to reconstruct from the data obtained from participant observation, interview, and practicum records the situations where the student starting providing care to the elderly person with dementia.

Results The results showed that the student established a connection in the following six situations; 1) when not understanding what was needed, trying to understand the intention of the elderly person from facial expressions; 2) finding a way to become involved with the elderly person based on nurse educators' advice; 3) deepening understanding of the elderly person by requesting that staff allow access to official records; 4) supporting the elderly person to enhance her functioning in daily life by confirming the validity

¹⁾聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

*E-mail : inoue-m@seisen.ac.jp

of the information obtained; 5) supporting the elderly person's independence by utilizing information on the goals for life functioning; and 6) providing instruction on muscle training by utilizing information obtained through observing the elderly person's responses during recreation.

Conclusion Taking as an opportunity the confusion that emerged on the first day of the practicum, the student started to think about and seek better involvement with the elderly person, by consciously incorporating the information provided by educators and the facility while actively providing nursing care to enhance life functioning.

I. 緒言

2006年、日本における高齢者の家族と世帯の調査では、高齢者世帯は、全世帯の約25%を占め、世帯の構成は、三世帯同居世帯の占める割合が急速に低下し近年では20%程度で推移している（内閣府，2008）。この状況から若い世代と高齢者との関わりが希薄になっていることがわかる。老年看護学実習指導において、看護学生（以後学生）が高齢者、特に認知症高齢者を理解することが困難とされている（松田ら，2004，平木ら，2008，宮地ら，2005，田中ら，2005）。それらは学生の記録に基づいたものが多く、学生の観察の視点や学生が認識できていない看護活動は含まれていない。そこで、介護老人福祉施設の実習において、学生はどのように認知症高齢者を理解し、人間関係を形成していくのか明らかにすることにした。

II. 研究目的

介護老人福祉施設における老年看護学実習で、学生の認知症高齢者に対する関係形成の過程を明らかにする。

III. 実習の概要

本研究の事例における実習概要は次の通りである。

1. 実習の目的

目的は、既習の知識・技術・態度を統合し、高齢者への看護の実践を通して基礎的臨床能力を身につけることとする。

2. 実習施設と指導体制

B県の介護老人福祉施設（以下施設）で、ケア体制は固定型ユニットケアである。指導は、担当教員（以後教員）が実習開始の前週に実習オリエ

ンテーションを行い、実習期間中、初日、4日目、最終日（5日目）は施設で指導を行う。施設指導者は、介護課長が指導の管理を行うが、日々の食事、排泄、移動等のケアはケアワーカー（以下CW）が学生に指導した。学生の気づきを高めるために、学生は最初に高齢者のケアプランを閲覧して関わるのではなく、CWから高齢者の説明を受けて日常生活援助を実施する方式とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

質的研究とし、一事例を分析する。

2. 研究対象

対象は看護系大学4年生の老年看護学実習（1単位）の実習生で、本研究に同意を得た女子学生1名である。

3. 学生が関わった認知症高齢者の概要

認知症高齢者（以後A氏）は、2年前に施設に入居した80歳代のアルツハイマー型認知症の女性である。A氏は、CWの簡単な質問には答えられるが自発的な言葉が少なく、対人的なコミュニケーションはやや困難である。食事は部分介助でほぼ全量摂取でき、移動は車いすを使用し、声かけを行うことにより自力で車椅子を操作して移動できる。

4. データ収集期間

平成21年6月29日～7月3日

5. データの収集方法

1) 参加観察法

研究者は観察者として、学生が施設において高齢者と関わる場面に参加した。学生の実習および高齢者の療養の負担にならないように、観察を行

う場所と観察時間を限定した。観察場所は食堂兼ダイルームで、初日・3日目・最終日（5日目）の9時から昼食介助が終了するまでの時間帯とした。観察場面は、学生とA氏とのコミュニケーション、食事介助、レクリエーション活動、教員や施設の実習指導者、CW、他の学生との関わりとした。観察の視点は、学生およびA氏の表情、会話、行動、学生の対応等であった。

2) 面接法

実習終了日に半構成的面接で、学生に参加観察で得たデータを確認してもらい、実習でA氏に関わっていた時の思考や判断を確認した。

3) 実習記録の閲覧

実習記録を学生の許可および実習指導者の許可を得て閲覧した。

6. データ分析と信頼性

分析は、参加観察と面接および実習記録を統合し、実習場面を再構成した。また分析過程は、質的研究のスーパーバイザーから指導を受け妥当性の確保に努めた。

7. 倫理的配慮

学生および施設管理者には、研究協力への任意性の保障、施設名や学生名の匿名性の厳守、プライバシーの厳守、データの厳密な管理や、データは研究以外に使用しない等倫理的配慮を含む調査の説明を行い同時に書面にて同意を得た。その後、施設管理者から認知症高齢者の紹介を得、実習開始前には研究者が施設研修を行い、認知症高齢者に研究目的・方法等の説明を行い、研究参加を依頼し同意を得た。本研究は、所属大学倫理委員会の承認を得て実施した。

V. 結果

学生とA氏との関係形成の過程（学生のA氏への理解と関わり場面）

1) 実習初日

場面①：食事介助の参加観察では、学生はCWに見守るよう説明を受け、A氏の昼食を見守っていた。しかしA氏の食事が中断するので、学生はA氏の代わりに食器を持ち、食器からスプーンで

摂取するよう促した。そして、学生はA氏に『おかし食べられますか?』と声をかけたが返答はなかった。そこで、学生は声かけが少なくなり全介助しながら黙ってA氏の様子を見守った。面接で学生は①の場面の思考・判断について、A氏の食事場面における情報が食事摂取がゆっくりであるということのみであったため、介助にとっても困った。そして、悩みながら介助したがA氏は返答ができない人かと思ったので会話が出来なければA氏の表情から意思を読み取ろうと思ったと話した。

場面②：参加観察では、学生達が食事介助していた時、担当教員がやって来て学生とA氏を見ていた。A氏の食事が終了し、学生は昼食後薬の服用を促すために薬袋を破った。その時学生は、教員から誤薬予防のため『名前確認は?』と言われた。学生はすぐにA氏の耳元で『お名前を言って下さい』と話しかけた。そこでA氏は、小声で『〇〇』と自分の氏名を正確に答えた。面接で学生は、②の場面の思考・判断は、A氏が与薬時に自分の名前を答えたことについて、学生は「先生（担当教員）の対応から、声に出せばいいのだと気づいた。それまでA氏への対応がかみ合わず認知症で訳がわからないと思っていたが、言葉で答えることができることに気づけたことが大発見だった」と嬉しそうに話した。

2) 実習3日目

場面③：参加観察では、学生は実習メンバーの学生とともに担当CWに申し出て、施設利用者の記録から情報収集を行った。面接で学生は③の場面の思考・判断は、記録から情報を収集してA氏の入所時の様子と現在の様子が大きく変化し認知症状が進んでいることに気づき、A氏の家族や今までの人生における出来事からA氏に抱いていた印象が変わり理解が深まったように思った。学生は、それまでA氏から得た情報の中で、正確なものと違っていたものがあったことがわかったと話した。また学生は、得た情報を活用してA氏の見当識障害、記名力のレベルの観察を行おうと考えたと話した。

場面④：参加観察では、学生は、A氏の食事介助を担当し、見守りながらスムーズに食事介助を実施していた。面接で学生は、④の場面の思考・判断は、初日の介助時にA氏が「わたし、持ってへん、わたし器持ってへんよー」ってしきりに言っ

ていたことを思い出し、A氏は器が持てるのだから、A氏自身に器を持ってもらい、学生はA氏の手を支えればよいことがわかり支えるように介助したと話した。研究者は、面接時に参加観察で得た食事介助の状況を伝えたが、学生はどのように介助したかはっきりと覚えていないと話した。しかし、学生はその後、A氏がスムーズに食事摂取ができたことを研究者に話した。学生は、「A氏の食事摂取動作が以前から出来ていたのか、今日は調子が良いからできたのかかわからないがすごいなあって思った。そしてとても楽しい食事介助ができたと感じた」と笑顔で話した。

3) 実習最終日(5日目)

場面⑤：参加観察では、学生は行き先を何度も確認し『トイレ』『トイレ』というA氏に、『トイレ』『トイレ』と声をかけ、自分で車椅子操作をするよう促した。その結果A氏は、時間は要したが食堂からトイレまで自力で車椅子を操作し往復することが出来た。

場面⑥：参加観察では、一時帰宅で外出予定が出されたA氏に対し学生は、転倒・骨折等の障害予防のため、下肢の関節や筋力のトレーニングの必要性を十分に説明して実施した。A氏は学生の促しに快く応じた。面接で学生は、⑤と⑥の場面の思考・判断は、A氏への関わり方を思案していた学生が、前日の「かるた取り」のレクリエーションの場面でA氏が“あ”“い”“う”と書かれたカルタを見て、『あいうえおのことやね』と自発的に言われたことを思い出した。そして、学生は、自発的な行動はできないと思い込んでいたA氏に対する認識を改めてA氏に必要なケアを判断できた。

VI. 考 察

初日の場面①で、学生はA氏に声をかけたが返答がなく、次第に言葉が少なくなり、黙ったままA氏を見守っていた。一見戸惑いから思考が停止しているように見受けられたが、面接で尋ねた結果、学生は悩みながらもA氏との会話が出来ないのでA氏の表情から意思を読み取ろうと思っていたことがわかった。これは松田ら(2004)が、認知症高齢者の理解では、学生は病態や症状を学習していても、実際の関わりでは消極的になると指

摘したことに重なると思う。場面②では、初日の学生は認知症高齢者について、全く意思疎通ができないものと思い込んでいたが、教員の指導により、A氏とは言語的な意思疎通ができることを理解できた。学生は、面接でA氏は意思疎通が可能であると気づいたことについて、「大発見」と答えていた。学生は、担当教員が学生に高齢者への関わりについてリアリティオリエンテーションモデルを示したものと考えられる。担当教員が誤薬防止のケアを指導した場面であったが、学生は誤薬防止のケアと同時にA氏の理解を深めたきっかけになった過程と考える。また、学生の「大発見」という言葉は、学生が主体的にA氏の理解を進められた過程であると考えられる。

3日目の場面③では、学生は担当CWに申し出て、施設利用者の記録から情報収集を行い、A氏の認知症状が入所時と現在では大きく悪い状態へ変化していることやA氏の家族、今までの人生の出来事からA氏への理解が深められた過程と考える。本実習では、介護施設の利用者のプライバシーを保護するため病院実習と同様に個人記録を全て閲覧するのではなく、ケアの必要に応じて学生が記録を閲覧することを許可する実習方針があった。学生は実習3日目に情報を必要とし、その貴重な情報からA氏の社会的背景を理解でき、対象理解を深めたと考える。場面④で学生は、A氏の食事介助を見守りながら無意識に食事介助をスムーズに実施した。これは学生が3日間でA氏の日常生活活動能力を観察し、情報を食事介助の場面に活用して、A氏に応じた援助、すなわちA氏の手を支えることでA氏自身が食事を摂取するという判断ができ必要に応じた援助が実施できたと考えられる。つまり学生は、必要な情報を把握し、A氏の行動に応じた援助を実施できたと考えられる。

最終日の場面⑤と⑥では、学生がA氏に対して、自分で車椅子を操作するように指導を行い、A氏はトイレまで自力で車椅子移動を行うことができた。また、外出予定のA氏に筋力トレーニングの必要性を説明し、A氏は、下肢の関節や筋力のトレーニングを実施することができた。これは学生が、A氏の全体像を理解し、残存機能に働きかけ、健康な日常生活機能を拡大する援助であったと考える。これは湯浅ら(2003)が述べている認知症高齢者の潜在能力を見出す方法とも重なると思う。場面⑦では、学生は「かるた取り」で、

A氏が“あ”“い”“う”と書かれたカルタを見て『あいうえおのことやね』と自発的に言ったため、A氏の認知能力、特に、長期記憶は認知症でも残存していることがあるので、A氏に対するアセスメントが修正されたと考える。また、A氏の自発性について気づくことができるきっかけになったと考える。最終日には、意識的にA氏に対しての身体面だけでなく精神的側面にも働きかけた関わりが可能になったと考える。

そのため教員は、実習指導において学生の認知症高齢者への関係形成の過程を良く観察し、学生の思考過程を大切に指導が必要であると考え。

VII. 結 語

介護老人福祉施設の実習において、学生が認知症高齢者に対する関係形成の過程は、戸惑いから観察、意識的に教員や施設の情報収集してより良い関わりを模索しながら、高齢者の生活機能を高める看護を提供していることがわかった。そのため教員は学生の認知症高齢者への関係形成の過程をよく観察し指導することが必要であると考え。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、貴重な時間を提供

して下さりご協力いただいた学生ならびに高齢者、ご指導いただきました方々に深く感謝申し上げます。

文 献

- 平木尚美, 辻村史子 (2008) : 認知症高齢者との関わりで看護学生が感じた困難と対処行動, 看護・保健科学研究誌, 8, (1) (通号12), 205-212.
- 国民衛生の動向厚生指標増刊 (2011) : 厚生労働統計協会58, (9), 39.
- 松田千登勢, 長畑多代 (2004) : 老年看護学実習における痴呆性高齢者の理解のプロセス, 大阪府立看護大学紀要, 10, (1), 43-50.
- 宮地真澄, 大町弥生, 平良陽子 (2005) : 老年看護学実習における学生の高齢者理解—ケーススタディの内容分析から—, 藍野学院紀要, (19), 43-49.
- 内閣府 (2008) : 高齢社会白書 (平成20年版), 佐伯印刷株式会社, 2.
- 田中敦子, 鳴海喜代子 (2005) : 認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査, 埼玉県立大学, 7, 59-66.
- 湯浅美千代, 野口美和子, 桑田美代子 (2003) : 痴呆症状を有する患者に潜在する能力を見出す方法, 千葉大学看護学部紀要, (25), 7-16

